

## 高等学校「古典探究」における魅力的な漢詩創作授業詩論

### 思考力，判断力，表現力等を育成する漢詩創作

奥出 千也・富山 敦史

要旨：平成三十年告示の高等学校学習指導要領解説国語編「古典探究」（選択）の「A読むこと」の言語活動には、漢詩の創作活動が掲げられ、句の意味構成や絶句の展開（起承転結）の指導とともに、押韻に拘らない絶句や律詩を創作することなどの配慮事項が解説に示された。これを踏まえつつ、漢詩創作の授業を生徒にとってより魅力的なものとするために、近年行われた漢詩創作を扱う実践を検討した結果、以下の要素を勘案しながら授業を構想することの示唆が得られた。すなわち、①構成上のきまりが近体詩（絶句や律詩）に比して緩やかな古体詩を創作する、②ICT等を活用し詩語表を工夫して作詩に使用する、③詩語の配置に際して漢文訓読のきまりや書き下し文を指導する。また、平仄の規則に基づいた近体詩（絶句や律詩）の創作は、生徒の知的好奇心を喚起し、作詩にあたっての論理的思考力，判断力，表現力等を育成する潜在的可能性があることを導出した。

キーワード：漢詩創作 高等学校国語科学習指導要領 詩語表 平仄 押韻

#### 1. はじめに

平成三十年告示の高等学校学習指導要領解説国語編「古典探究」（選択）の「読むこと」の指導事項には、

ウ 古典を読み、その語彙や表現の技法などを参考にして、和歌や俳諧、漢詩を創作したり、体験したことや感じたことを文語で書いたりする活動。

と、従来の「古典A」「古典B」では扱わなかった漢詩の創作が示され、その解説には、

なお、漢詩を創作する際には、多くの場合、五言の句は意味の上で二字と三字の構成となり、七言句は四字（二字と二字）と三字の構成になっていることや、絶句の起承転結の展開を確認することが必要である。そのうえで、押韻は正確でなくてもよいことにするなどして、絶句や律詩などを創作することが考えられる。韻文を創作する際には、古典の作品を模倣したり、文語で文章を書く際には、短い分量の文章を書いたりするなど、使い慣れていない古文や漢文などで用いられている語彙を使用することに配慮した指導の工夫も必要になる。

と、示されている（傍線は筆者）。

ここで示されている漢詩（絶句や律詩など）を創作する際の配慮事項を以下①～⑤に整理してみる。

- ①句の意味構成…五言（二字＋三字），七言（四字〔二字＋二字〕と三字）となること
- ②絶句の構成が起承転結の展開であること
- ③押韻が正確でなくてもよいこと
- ④古典作品を模倣することや文語で書く文章の量について配慮すること
- ⑤使い慣れていない語彙の使用について配慮すること

ここで、①と②については、漢詩のルールとして当然踏まえるべきものであるが、③については、押韻の仕組みや定型詩として絶句や律詩が成立するための必要不可欠な条件である平仄や対句等については些かも触れられず、「押韻は正確でなくてもよい」としている。このことは、生徒の漢詩創作に対する難易度を考慮してのことと思われるが、そもそも指導者自身が「漢詩とは何か」（古体詩，近体詩の区別等）を定義することや、生徒が「漢詩」を学ぶことの本質的意義（思考力・判断力・表現力等の育成に繋がる知的論理的思考の喚起等）を考えることに対しては、大いに問題点があるといえよう<sup>注1</sup>。

④と⑤は韻文で創作する際の配慮事項として挙げられているが、漢詩創作の際に用いる語彙（いわゆる詩の言葉としての詩語）は、日本の古典と同様に、いやそれ以上に、典故としての扱いが重要となる。また、それに関係して現代語との意味の相違や漢文法に則った語の配置などが古典としての指導における極めて重要な課題となってくる。

本稿では、近年教育現場で行われた漢詩の授業実践（漢詩創作）を検討し、その成果と課題を明らかにするとともに、「古典探究」での漢詩創作の授業を、生徒にとって魅力的かつ知的好奇心や論理的思考力，表現力を喚起できるものとするための要素や条件等について考えてみたい。

## 2. 「漢詩創作」授業実践の検討

ここでは、近年行われた漢詩の創作に関する実践を検討し、その成果と課題をみていきたい。

### ① 森野知子（1996）<sup>注2</sup>「漢詩を作る ～漢文に親しませるために～」（対象：高校2年）

「卒業生を送る」など指定のテーマに沿って現代日本語で作った詩を、漢詩に直すという実践（2時間）。この前時には、短い漢文の授業（漢文の基本構造・漢詩のきまり・口語訳等5時間）を行っているが、今回は五言絶句での完成を目標としている。

「平仄・音韻は考えなくてもよい」という条件のもとで行われた活動であり、平成三十年告示の高等学校学習指導要領解説の内容とも合致しているため、今後教師たちが大いに参考にできる活動ともなるだろう。一方で、漢詩の音韻的特徴や平仄については活動で触れないため、それらについて知識が定着せず、言葉遊びのままに終わってしまう可能性も考えられる。

### ② 小嶋明紀子（2010）<sup>注3</sup>「高等学校における漢詩づくりの実践」（対象：高校1・2年）

漢詩の規則について説明した後、生徒に起承転結の草案を口語でワークシートに書かせ提出させたものに、小嶋氏が漢語にするためのアドバイスを書き添えて返却し、生徒がそのアドバイスを基に口語文を漢詩へと置き換えていくという実践。生徒たちがつくった草案は季節や自然だけでなく、部活動や社会問題といった内容まで取り扱われ、自身の作った文が漢詩になるまでを体験できる。漢詩と日常生活をつなげた学習活動が可能で、その実現には小嶋氏の的確なアドバイスが重要な役割を果たしており、どの教師でも再現可能と言える実践ではないだろう。

### ③ 武井武（2017）<sup>注4</sup>「古典の学習における「創作」の要素を取り入れた言語活動の試み」（対象：中学2年）

漢詩を日記風の文章に書き換えるという活動を行う中で、生徒が古典を主体的に読むことを狙った実践。漢詩を書き換えるうえで必要な情報を生徒に考えさせ、それら

を調べたり想像したりしながら班ごとで作業を行っていき、出来上がった作品は班の中で読み合い、様々な考え方に触れる中で詩の作者の気持ちを再考させた。結果として、日記を書くことを通しての内容理解や根拠のある想像、作者の心情考察と自分ごととしての振り返りができるようになるという成果が得られたとされる。

- ④ 高芝麻子（2018）<sup>注5</sup>「漢詩実作教材「漢詩カード」試論—中学校・高等学校での教材として—」（対象：大学2年，高校2年，中学2年）

詩語集・詩語表と同じ機能を備えたまま、なすべき作業手順や現在の進捗状況を可視化するために詩語カードを用いて班ごとに漢詩を創作するという授業実践詩論である。詩の実作を行うことで平仄や音韻のルールを理解し漢文に親しむという一般的な学習とは逆の進め方で行われるため、作品の完成度は度外視される。完成した作品については、教師がその面白みを指摘することで、生徒自身が創作した詩のフィードバックができるようにしている。大学院生の胡氏による実践（中学2年対象）では、カードの種類ごとに色分けし、平仄の理解が及ばない生徒でも取り組めるよう工夫がなされている。

詩語カードを使用したこの方法では、詩語の用法や語順について正確を期することが難しく、生徒自身が詠いたいことを表現するのも難しくなり、使用する語彙や解釈についてはどうしても限定的なものとなっている。

- ⑤ 大栗真佐美（2019）<sup>注6</sup>「日本文化を探る—漢字・漢詩を通して考えよう— 附属中学校と大学との連携—」（対象：中学2・3年）

「MET」という学校独自の総合的な学習の時間の中で、京都教育大学国文学科教員と提携して行われた。漢詩の構造を学習した後、詩語集や平仄が記載された漢詩づくりのためのテキストを基に班ごとに漢詩を一種ずつ創作し、最後に作品を発表するという実践。創作した作品を発表する際には、どの班も音韻や平仄の規則に従った漢詩（書き下し文や口語訳を含め）を作ることができた。完成作品を補助に入った大学院生が講評するなど、生徒のより深い興味・関心につながる取組もある。「MET」は5・6時間目に連続して行われ、多くの関連する知識を一斉に教えやすいため、全二回で漢詩の学習と創作・発表を行うことができている。また、授業が1週間に一回である都合上、漢詩の構造の学習と創作に時間的余裕があり、その期間に各自が班で分担した一句を作っておくことになっている。通常の国語科授業では、知識をどのように教えるか、分担した句を創作する時間をどう確保するかなど、時間配分に囚われることが多くなるため、総合的な学習の時間「MET」の特徴を生かした実践であるといえる。

- ⑥ 大栗真佐美・谷口匡・中俣尚己（2020）<sup>注7</sup>「日本文化を探る—漢字・漢詩を通して考えよう— 第2年次：附属中学校と大学との連携—」（対象：中学2・3年）

前年度の内容に加え、中国から帰省した生徒に中国語で読んでもらい漢詩の響きや音韻を確認するなどの活動が追加されることで平仄についても、実際に音で聞くことで声調を実感できる実践となっている。授業回数は全三回となり、班の誰かが一句を作り忘れても漢詩を完成させるための時間を設けることができるようになった。できあがった漢詩作品は、前回同様に発表するが、同じ字の重複、書き下し文に修正を要するといった問題点が出ている。これらについては教師が修正していく必要があり、いかに的確に指導できるかという教師の漢文に関する知識を要する部分となる。

「MET」の授業実施時に国語科では2年生は、漢詩は未修であったが、漢詩のルールが理解でき、参加者全員が漢詩創作を楽しんでいるという授業後の感想を述べていることから、活動の意義や価値、効果は十分にあったと考えられる。

⑦ 岡本利昭（2020）<sup>注8</sup>「中等教育段階での『漢詩創作指導』」（対象：中学2年）

中学二年生を対象に週に一時間の授業を12月まで行い、教科書に採用されている漢詩や平仄に忠実な日本漢詩を用いて音韻や平仄、作者の生涯などを学び、最後は定期考査という限られた時間の中で詩語表を用いながらの七言絶句作詩をさせた実践である。結果としては、定期考査の時間内のほとんどの生徒が何らかの形で漢詩を創作することができた一方で、全体の44%の生徒が書き下し文を正確に書くことができなかったことなどが課題となった。これについて岡本氏は、「中学2年の段階で、漢文法や書き下しの規則などをあまり学習していないことが原因と考えられる。」としつつも、この漢詩創作の授業が、生徒が書き下し文を学ぶきっかけとなったとしている。

### 3. 「漢詩創作」授業実践の課題

前項の授業実践を検討する中で、漢詩創作の授業を構築する際のさまざまな課題が浮かび上がってきた。まず、漢詩創作という言語活動の課題として「詩語表を基に漢詩を創作すると、生徒たちが親近感を持っている身近にある物事や思いについて詠いづらいのではないか」ということが挙げられる。確かに初心者が漢詩を創作する上で、詩語表は非常に助けになるものであり、例えば「月」などに関係した「詩語」を組み合わせて詩をつくるならば、生徒も比較的容易に場面を表現することができるだろう。しかし、その詩中に自分の思いや考えを入れることは可能なのだろうか。詩で描いた風景は、詩語表内の詩語から自分が想像した単なる綺麗な景色を表現するだけで終わってしまうのではないだろうか。もちろんこれでも作詩のルールや訓読の規則に則った詩が創作できるなら、それもよしとできる。しかし、文学作品としての漢詩の意味や成立背景に教師自身が思いを馳せてしまうと、これで終わってしまうのは非常に勿体無いと考えてしまうだろう。この創作における根本的な課題とどう向き合っていけばいいのだろうか。

武井氏は、漢詩を日記風の文章に置き換える活動を行っていたが、その逆のアプローチ、つまり、日記等の文章を漢詩に置き換えるといった活動ならば、生徒が自分の身近にある物事を題材に漢詩を創作することができるのではないだろうか。このような観点から日本語から漢詩に変換する言語活動としては、日本語で作った詩を押韻、平仄に関係なく五言絶句に置き換えた森野氏の活動や、起承転結の草案を現代語で書かせ、それに対する教師のアドバイスを基に漢詩への変換を行う小嶋氏の活動などがある。森野氏は活動の中で詩のテーマを固定していたが、小嶋氏は「季節・自然の詩は最も作りやすい」と説明したうえで、生徒に題材を任せており、その結果、歴史上の人物や部活動、友情についてなど、幅広いジャンルの草案が出た。これらの草案をルールに沿った漢詩に変換できた理由には、小嶋氏の正確なアドバイスや、漢詩や創作の意義、楽しさを生徒に伝えたことが大きい。裏を返すと、生徒に自由なジャンルで漢詩創作をさせるとなると、教師に相当の知識と熱意が必要となり、教師によっては負担だと感じる人も出てくるだろう。また、森野氏の活動や高等学校指導要領が示す「押韻は正確でなくてもよいことにする」などには、漢詩の指導上課題とすべき点があるが、完全な漢詩を作ることも限られた授業の中では難

しく、また大変なことでもある。このように考えると、平仄や対句等はほどほどに、しかし押韻には注意させるという指導が妥当なことのようにも考えられる。そこで創作を目指す漢詩は、絶句や律詩のような近体詩ではなく、古体詩（古詩）に近い詩の創作を行うという活動が、生徒と教師双方に負担の少ない、それでいて漢詩に触れる活動として適切なのではないだろうか。ここで、近体詩（絶句・律詩）と古体詩の構成上の違いを大まかに表すと次の図のようになる。

	近体詩（絶句）	近体詩（律詩）	古体詩
一句の 字数	五字または七字	五字または七字	四,五,六,七字など より自由な楽府体も ある
一首の 句数	四句	八句	偶数であれば自由
押韻の 場所	五言：二,四句の末尾 七言：一,二,四句の末 尾	五言：二,四,六,八句の末尾 七言：一,二,四,六,八句の 末尾（原則一句は押韻）	原則偶数句の末尾 途中で韻の種類を変 えてもよい(換韻)
平仄の 規則 <sup>注9</sup>	あり	あり	特になし
その他		対句(同じ構成で中身が対 になっている二句)が必要	

このように古体詩の規則や制約は、絶句や律詩に比べて非常に緩く、平仄の規則も厳しく決められていないため、一句の字数や一首の句数を自由に決めることができ、漢詩について専門的な知識のない教師でも比較的容易に創作活動の計画や実践を行いやすいといえることができる。

もう少し深くまで扱いたいのならば、創作活動の中で扱う詩語表においては既成のものだけでなく、現代の生徒たちの実態に合ったものを作って用いるのはどうだろうか。具体的に言うと、生徒たちの力で詩語表を作らせたらどうだろうか。先述したように、既存の詩語表に収められた詩語は現代語と意味の相違がみられることもあり、生徒が誤用する危険性や生徒の伝えたい物事とニュアンスが少し異なる場合もある。そのような詩語をパズルのように組み立てて漢詩を創作するよりも、現代の生徒たちの感覚に近い、表現したいものを的確に表現できる詩語を自分たちで作りながら創作することで、平仄や漢詩の構成の学習、漢詩創作への意欲向上へのつながりが期待できよう。GIGA スクール構想が進み、一人一台のタブレットが導入されて、生徒一人一人の意見を一か所に集約・共有することが非常に容易なこととなったことで、生徒たちが自由に投稿、閲覧できるオリジナルの詩語表をデータ上で製作することも、そう難しいことではないと考えられる。

もっとも、これらの活動をするうえで、漢詩創作の目的を考えなければならない。現代文を漢詩にするにしろ、自分たちで詩語（表）を作るにしろ、生徒にとって非常にハードルの高いことである。生徒が作った詩や詩語は、平仄こそ正しくてもルールに沿ったものにならない可能性は十分にある。詩の置き換えにおいては、うまく漢詩に置き換えられなかったり、平仄に合わなかったりと多くの生徒がつまずくことも考えられる。押韻、平仄、対句などのルールに完全に沿った漢詩の創作を目的とするならば、これらの活動より

も既存の詩語表を用いた活動が適切と言えるだろう。しかし一方で、自分たちが伝えたいことを漢詩で表現できたという経験や感動が生徒たちに与えるものは非常に大きく、漢詩や漢文への見方や意識の変化が十分に期待できるだろう。漢詩創作を通して生徒に学ばせることは何か、生徒の創作した詩にどれほど完成度を求めるべきかを考えながら、効果的な活動を設定しなければならない。

さて、漢詩の創作とともに行われる、書き下し文の学習をどのように行っていくかということも、今後の課題となるだろう。書き下し文ができなければ、せっかく創作した詩が詠めないこととなるため、書き下し文作りも重要な創作活動の一つといえる。しかし、岡本氏や大栗氏の実践でも問題となっていたように、漢詩が創作できても、書き下し文が十分にできない可能性がある。というのも、書き下し文を作るためには漢詩のルールとはまた異なる知識が必要となり、生徒にとってはその知識も普段の国語学習の中では、あまり触れるものではないからだ。中学1年、2年で訓読のルールを学習しても、その知識で書き下し文を作るには何らかの補助が必要になってくるだろう。補助としては、辞書で調べさせる、読み方を載せたテキストや詩語集を用意する、教師が訂正・添削する等あるが、生徒にとって初の漢詩創作と同時に行うのは、生徒にも教師にも負担が大きいように感じる。何よりも、漢詩が完成した際の達成感や感動を削いでしまう可能性があるため、書き下し文の学習法は注意して設定する必要がある。

#### 4. 「漢詩創作」の授業を実現するために

漢詩創作の授業をするにあたって、「何をどこまで教える／定着させるべきか」は、非常に悩ましい部分である。これは、生徒に定着させることももちろんだが、教師がそれ以上に漢文や漢詩について理解していなければならないという点も関わってくる。全国の国語科教員が、上記の先行実践者と同等の漢詩漢文に関する知識量を持つためには、多くの時間と労力を要することとなる。また指導時間の確保においても、岡本氏や大栗氏のような特殊な授業計画でない限り、他の単元との時間調整もしなければならず、詳しい解説をすることも難しい現実を踏まえなければならない。

一方で、音韻や平仄といった、漢詩を形作る要素を扱うことのない漢詩創作というのは、漢詩の学習としていかなものだろうか。生徒の学習負担の軽減とされるが、果たして、高等学校学習指導要領解説で示される「思考力・判断力・表現力等」を育成することに堪えられる実践となりうるのであろうか。岡本氏が指摘するように、平仄や押韻を念頭においた詩語表による漢詩創作は、PISA 調査などでも指摘されている我が国の児童・生徒の知識活用力や応用力の不足を補うものとして活用できる可能性にも改めて注目したい。このような考えのもと、森野氏の活動や高等学校学習指導要領で示される制約のほぼ無い創作と、小嶋氏の活動等に見られる実際の漢詩を作る活動の折衷案として、古詩に近い漢詩作りやオリジナルの詩語表作りを授業構想した。さらに、この活動に ICT 機器を効果的に活用していくことで、生徒たちが自分たちの作りたい詩を容易に創作できるだけでなく、教師にとってもアドバイスや評価がしやすいというメリットも見込まれるだろう。

現在は高等学校の学習指導要領でのみ漢詩創作について言及されているが、願わくはこのような創作活動が中学校の授業の中でも行われるようになってほしいものである。漢文の学習を始めたばかりの中学生に、漢文や漢詩の知識と共にその面白さを知ってもら

ことで、その後の論理的な言葉の学習に生かしていくことができるだろう。また、このような活動を経ることによって、高等学校では、より本格的な漢詩創作につなげることでもできるだろう。令和4年度実施の高等学校学指導要領により、漢詩創作の授業実践が増加するにつれ、新たな課題も浮き彫りとなるだろう。それらを踏まえて、生徒たちに効果的で価値のある活動を行うためには、今回提案した活動等を実践していき、さらに検証を図っていく必要がある。

最後に、これまで実施されてきた漢詩漢文の授業に関する多くのアンケートには、「漢文は入試に出題されないので、学ぶ意味がない」や「これからの実生活には役立たない」というような生徒の回答が多く見受けられるが、「入試に出題されないからこそ、すぐに役立たないからこそ、学ぶ価値がある」ということを、教師自身がどれだけ深く自問自答しているであろうか。ある意味において、答えのない「問い」に向かっていく教師自身の実体験やそれを探究しつづける姿勢を生徒に語っていくことが、今こそ必要ではないだろうか。

## 参考文献

- ・高等学校学習指導要領解説 国語編，文部科学省，2018
- ・はじめての漢詩創作，鷺野正明，白帝社，2005
- ・中学校・高等学校 漢文の学習指導 実践史をふまえて(ことばの授業づくりハンドブック)，富安慎吾編，溪水社，2017

## 注

注1：高等学校学習指導要領(平成三十年告示)に先立って示された「中央教育審議会」答申

(2016.12.18)では、新しい古典に関する選択科目「古典探究」について、

古典を主体的に読み深めることを通して、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する科目として、主に古文・漢文を教材に、「伝統的な言語文化に関する理解」を深めることを重視するとともに、「思考力・判断力・表現力等」を育成する。

と、「伝統的な言語文化に関する理解」をより深める科目であるとともに「思考力・判断力・表現力等」を育成する科目であることを示している。

注2：森野知子「漢詩を作る～漢文に親しませるために～」，広島大学教育学部光葉会，『国語教育研究』39，1996

注3：小嶋明紀子「高等学校における漢詩づくりの実践」，全国漢文教育学会，『新しい漢字漢文教育』51，2010

注4：武井武「古典の学習における「創作」の要素を取り入れた言語活動の試みー中学生が主体的に古典を学ぶためにー」，山梨大学教職大学院，『平成28年度 教育実践研究報告書』，2017

注5：高芝麻子「漢詩実作教材「漢詩カード」試論ー中学校・高等学校での教材としてー」，横浜国立大学国語教育研究会，『横浜国大國語教育研究』43，2018

注6：大栗真佐美「日本文化を探るー漢字・漢詩を通して考えようー附属中学校と大学との連携ー」，京都教育大学教育創生リージョナルセンター機構教職キャリア高度化センター，『教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要』1，2019

注7：大栗真佐美・谷口匡・中俣尚己「日本文化を探るー漢字・漢詩を通して考えよう 第2年次：附

## 高等学校「古典探究」における魅力的な漢詩創作授業詩論

属中学校と大学との連携」, 京都教育大学教育創生リージョナルセンター機構教職キャリア高度化センター, 『教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要』2, 2020

注8: 岡本利昭「中等教育段階での『漢詩創作指導』」, 神戸大学附属中等教育学校『研究紀要: 神戸大学附属中等論集』4, 2020

注9: 平仄の規則 (○は平声, ●は仄声, △は平仄どちらでも可, ◎は押韻)

### 【絶句】

#### 五言絶句

(平起こり)

△○○●●

△●●○◎

△●○○●

△○△●◎

(仄起こり)

△●○○●

△○△●◎

△○○●●

△●●○◎

#### 七言絶句

(平起こり)

△○△●●○◎

△●△○△○◎

△●△○○●●

△○△●●○◎

(仄起こり)

△●△○△●◎

△○△●●○◎

△○△●○○●

△●△○△●◎

### 【律詩】

#### 五言律詩

(平起こり)

△○○●●

△●●○◎

△●○○●

△○△●◎

△○○●●

△●●○◎

△●○○●

△○△●◎

(仄起こり)

△●○○●

△○△●◎

△○○●●

△●●○◎

△●○○●

△○△●◎

△○○●●

△●●○◎

#### 七言律詩

(平起こり)

△○△●●○◎

△●△○△●◎

△●△○○●●

△○△●●○◎

△○△●○○●

△●△○△●◎

△●△○○●●

△○△●●○◎

(仄起こり)

△●△○△●◎

△○△●●○◎

△○△●○○●

△●△○△●◎

△●△○○●●

△○△●●○◎

△○△●○○●

△●△○△●◎

## 付記

本研究は, 令和4年度常葉大学特別研究補助費および学長研究奨励費の助成を受けたものの一部である。